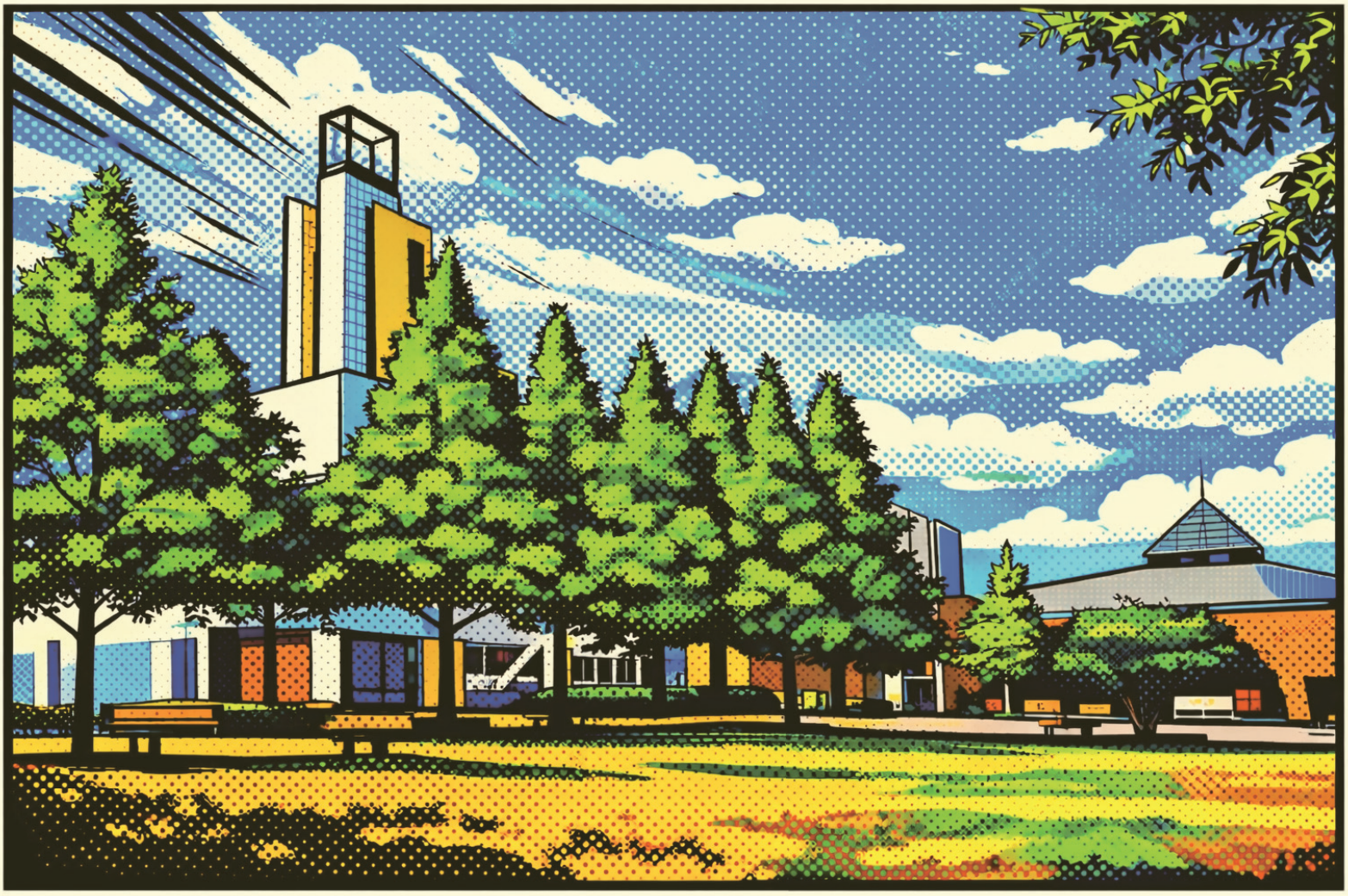
2025年度

北九州市立大学
FD活動報告書

FD研修報告
授業ピアレビュー報告
特集：新カリキュラムにおける特色ある科目



北九州市立大学　FD委員会

2025年度FD活動報告書

目次

1. はじめに ・・ 1

2. FD研修報告
(1) 春季新任教員FD研修 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
(2) 夏季新任教員FD研修 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
(3) 第1回 全学FD研修
「教学IRと教育改善のためのデータ活用 ～志願動向と入学者アセスメント」・・ 9
(4) 第2回 全学FD研修「アントレプレナーシップ教育」 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13

3. 授業のピアレビュー報告
(1) 概要 ・・ 17
(2) 実施状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
(3) 各部局の取組状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18

4. 【2025年度 特集記事】
新カリキュラムにおける特色ある科目 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37

5. FD委員会について
(1) 活動概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 51
(2) 活動一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 52
(3) 委員構成 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 54
(4) 委員会議事録 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 54

※Web ページ掲載にあたって原本から一部削除した頁があります

第１章

はじめに

はじめに

副学長（教育・FD 担当）
FD 委員会委員長 後藤宇生

北九州市立大学では、今年度から新しいカリキュラムが始まりました。このカリキュラムでは、学生は、最大約 30 単位のメディア授業を受講することが可能となります。今後も、既存の良い部分を残しつつ、時代の流れに即したカリキュラムを模索して行きたいと考えています。

今年度は、次のカリキュラムを考える機会や授業を充実するため、2 つの FD 研修を行いました。1 つは、教学 IR のデータと共通テストのデータを利用し、新入生、在学生の学生像の理解を行い、授業の改善やカリキュラムの特色を考える機会にするものです。もう 1 つは、今年度からスタートした「アントレプレナーシップ教育プログラム」の状況と全学的理解の促進を目的とした研修を行いました。

1）「教学IRと教育改善のためのデータ活用 ～志願動向と入学者アセスメント」
講師: 日高京子先生(基盤教育センター、教育改革推進室教学IR推進部門長)
(2025年9月22日（月）～ 2025年10月31日（金）)

教学 IR 推進部門の協力を得て、教育アセスメント（GPS-Academic 等）と共通テストのデータを用いて、入学者と在学生の学生像の理解を深めるとともに、日々の授業改善やカリキュラム設計にその知見を活かすことでした。また、各学部学科で分析ができるように 可視化に優れている Tableau のファイルを提供し、データを根拠とした議論を行えるような環境を提供しました。研修をきっかけに、教員ひとりひとりが、自ら所属する学部学科等の学生像についての理解を深め、授業内容の改善に取り組むことを期待しています。本研修の参加者数は 239 名(88%)でした。

2）「アントレプレナーシップ教育」
講師：一般社団法人 フミダス 代表 濱本 伸司 氏
(2025年10月22日（水）)

近年、アントレプレナーシップを身につけた人材の育成が社会的に必要とされるようになり、今年度から本学でも「アントレプレナーシップ教育プログラム」がスタートしました。そのような状況を踏まえ、他大学における取り組み状況やその効果等の現状について把握し、アントレプレナーシップ教育の意義に対する理解を促進することを主な目的として、研修を実施しました。本研修の参加者数は 230 名(85.3%)でした。

上記のような FD 活動のほか、授業評価アンケートを行い、学生から授業に対する意見を聞いて、改善に役立てる活動も継続的に行っています。授業評価アンケートシステムの改善も含めて、今後も、より効率的に授業改善が進むように、検討を続けたいと考えています。

最後になりましたが、昨年度に引き続き、上月翔太先生（愛媛大学）に FD アドバイザーとして、着任していただきました。春と夏の 2 回の新任教員研修・全学 FD 研修を含め、1 年にわたり熱心な FD 活動へのご協力を賜ってきました。この場を借りて、御礼申し上げます。

第２章

FD 研修報告

（1）春季新任教員 FD 研修

■ 日　　時：2025 年 4 月 3 日（木）　13:00 ～16:00
■ 場　　所：北方キャンパス　本館 D-503・B-301～306・B-203～204
■ 研修テーマ：授業設計の基本－1 コマの授業設計
■ 研 修 講 師：上月翔太（FD アドバイザー）
■ 研修のプログラム：

時間	内容
13:00～13:10	オリエンテーション
13:10～14:40	授業設計の基本（講義）
14:40～14:50	休憩・教室移動・準備
14:50～15:50	模擬授業とピア・レビュー（演習・各教室）
15:50～16:00	まとめと振り返り

■ 参加者数：新任教員 17 名、メンター10 名、他 3 名（FD 委員、FD アドバイザーを含む）

■ 内容の要約

研修の到達目標は「学習目標に適した授業方法を選択できる」、「学生の学習を促す 90 分の授業の計画を作成できる」「作成した授業計画案にもとづいて模擬授業を実践できる」の 3 点と設定された。研修当日は講義科目に焦点をあてた授業設計の基本についての講義があった。主だった内容は、「コース設計（1 つの学期における授業の設計）とクラス設計（1 回の授業の設計）」、「学習目標の点検」、「導入・展開・まとめ」についてである。その後、90 分間 1 コマの授業計画を新任教員が個人ワークとして作成した上で、新任教員とメンターから構成されるグループ（4 人程度）に分かれ、グループディスカッション、模擬授業、ピア・レビューが行われた。

■ 研修結果とコメント

今年度も、基本的な授業に関する講義は 1 時間程度とし、残る 2 時間は授業実践にあたっての個人ワーク、グループディスカッション、模擬授業の時間に充てた。新任教員による活発な議論が行われた。

新任教員とメンターあわせて 27 名が参加したが、研修後のアンケートにおいて、そのうち 19 名が「大変よかった」、7 名が「よかった」と回答した。また自由記述においても多くの肯定的なコメントがみられた。

(2) 夏季新任教員 FD 研修

■ 日　　時：2025 年 8 月 25 日（月）13:00 ～16:00
■ 場　　所：北方キャンパス　本館 D-503
■ 研修テーマ：学習評価と授業改善の方法
■ 研 修 講 師：上月翔太（FD アドバイザー）
■ 研修のプログラム：

時間	内容
13:00～13:10	オリエンテーション
13:10～14:10	学習評価の原理（講義＋ワーク）
14:10～14:30	学習評価の振り返り（グループワーク）
14:30～14:40	休憩
14:40～15:20	授業改善の方法（講義＋ワーク）
15:20～15:30	具体的な授業改善の検討（個人ワーク）
15:30～15:50	授業改善案の発表（グループワーク）
15:50～16:00	まとめと振り返り・クロージング

■ 参加者数：新任教員 17 名、メンター12 名、他 3 名（FD 委員、FD アドバイザーを含む）

■ 内容の要約

「学習評価の原理を踏まえて評価方法の見直しを図ることができる」こと、「前学期の授業を振り返り、具体的な改善の指針を得ることができる」こと、を到達目標とした。

新任教員には、事前課題として、1 学期に担当した科目のうち、①担当授業の概要とそこで行った評価の方法、②評価において困ったことや難しいと感じたこと、③担当授業でうまくいったことと課題を感じたこと、④授業を通じて感じた北九州市立大学の学生の特徴について、まとめておくようにとの指示があった。研修当日は、学習評価の原理、授業改善の方法について講義があり、事前課題を踏まえ、メンターを加えたグループごとに、1 学期に実施した授業の学習評価の振り返り、これからの授業の具体的な改善点についてディスカッションや発表が行われた。

■ 研修結果とコメント

今年度も、参加者同士のグループディスカッションを中心に研修が進められた。講義の後、すぐに参加者の意見交換に移れるように、移動可能な机と椅子のある D-503 教室を準備した。講義と活発なグループディスカッションが実現できたものと思われる。今回は、ほとんどのグループが北方キャンパス教員とひびきのキャンパス教員の組み合わせで構成された。他の領域の教員とのグループワークは意義のある経験になったと思われる。

研修後のアンケートでは、概ね、肯定的な評価が得られたと思われるが、内容や開催時期・時間ついての指摘もあった。

(3) 第1回 全学FD研修

■ 日　　時：2025年9月22日（月）～2025年10月31日（金）
■ 形　　式：Stream配信による視聴
■ 主　　催：FD委員会
■ テ ー マ：「教学IRと教育改善のためのデータ活用 ～志願動向と入学者アセスメント」
■ 講　　師：基盤教育センター　日高　京子　先生
■ 参加者数：239名

出席者内訳

学科	出 席 者
外国語学部	27 名
経済学部	26 名
文学部	31 名
法学部	29 名
地域戦略研究所	5 名
国際教育交流センター	3 名
地域共生教育センター	1 名
情報総合センター	1 名
大学院マネジメント研究科	9 名
基盤教育センター（北方）	26 名
基盤教育センター（ひびきの）	6 名
環境化学工学科	14 名
機械システム工学科	11 名
情報システム工学科	13 名
建築デザイン学科	12 名
環境生命工学科	12 名
環境技術研究所	8 名
その他（学長、特任教員）	5 名

■ 研修の概要

本学教学 IR 推進部門は、志願者動向や入学者の教育アセスメント（共通テストや GPS-Academic 等）を用いて、多角的に学生像を分析してきた。本研修では、それらのデータを Tableau による可視化を通して共有し、本学学生像の理解を深めるとともに、日々の授業改善やカリキュラム設計に活かす視点を養うことを目的とした。

■ 実施結果

本研修の参加者数は 239 名であった。データの多くが学部学科等ごとに示されたため、自らの学科を他と比較して、現状を見つめ直す良い機会になったと思われる。アンケート結果を見ると「非常に参考になった」「参考になった」の割合が 9 割近くとなっており、関心の高さがうかがえる。また、入学者、志願動向、教育内容の改善点について、さまざまな意見が寄せられた。本研修をきっかけに、教員ひとりひとりが、自ら所属する学部学科等の学生像についての理解を深め、授業内容の改善に取り組むことが期待される。

(4) 第2回 全学FD研修

■ 日　　時：2025年10月22日（水）
■ 形　　式：【北 方 教 員】対面（オンデマンド配信）
　　【ひびきの教員】オンデマンド配信
■ 主　　催：FD委員会
■ テ ー マ：「アントレプレナーシップ教育」
■ 講　　師：一般社団法人　フミダス　代表　濱本　伸司　氏
■ 参加者数：230名

出席者内訳

学科	出 席 者
外国語学部	30 名
経済学部	25 名
文学部	31 名
法学部	30 名
地域戦略研究所	4 名
国際教育交流センター	1 名
地域共生教育センター	1 名
情報総合センター	1 名
大学院マネジメント研究科	9 名
基盤教育センター（北方）	24 名
基盤教育センター（ひびきの）	5 名
環境化学工学科	13 名
機械システム工学科	12 名
情報システム工学科	12 名
建築デザイン学科	11 名
環境生命工学科	11 名
環境技術研究所	7 名
その他（学長、特任教員）	3 名

■ 研修の概要

近年、アントレプレナーシップを身につけた人材の育成が社会的に必要とされるようになり、今年度から本学でも「アントレプレナーシップ教育プログラム」がスタートした。そのような状況を踏まえ、他大学における取り組み状況やその効果等の現状について把握し、アントレプレナーシップ教育の意義に対する理解を促進することを主な目的として、研修を実施した。

■ 実施結果

本研修の参加者数は 230 名であった。研修を通じた「アントレプレナーシップ教育」に対する理解度については、肯定的な意見が多く、全体の６割強を占めていた。その一方で、全体の１割弱の先生方にはご理解いただけなかったようだ。記述式の回答結果全般から言えることは以下の通り。

テーマや問題意識に対する共感度は比較的高く、マインドセット（対話と内省、心のあり方、熱を浴びる等）の部分が印象に残ったという先生が多かった。また、今回のテーマに親和性の高い学科等の先生からは前向きな反応が多くみられた。

その一方で、研修内容の抽象度が高かったため、学部等での教育内容に実装するヒントになる、もう少し具体的な内容を求める声が多かった。また、改善のヒントになるご意見として、学部等の教育目的や手法の違いを踏まえた研修内容にする、もしくは、必修研修ではなく希望者のみ参加するものにすべきというご意見もあった。加えて、学術的根拠の弱さに対する強い反発のご意見もいただいた。

第３章

授業のピアレビュー報告

(1)概要

以下に示す授業のピアレビュー実施状況と報告は、今年度における各部局各学科等で行われたピアレビュー活動の報告である。“授業のピアレビュー”活動は、教員相互の授業公開・参観・授業改善のためのミーティングを含んでいる。

(2)実施状況

部局		実施授業回数
外国語学部	英米学科	4
	中国学科	1
	国際関係学科	2
経済学部	経済学科	8
	経営情報学科	
文学部	比較文化学科	4
	人間関係学科	2
法学部	法律学科	2
	政策科学科	5
地域創生学群	地域創生学類	3
国際環境工学部	環境化学工学科	4
	機械システム工学科	4
	情報システム工学科	7
	建築デザイン学科	6
	生命工学科	7
基盤教育センター	教養教育部門	4
	語学教育部門	
	ひびきの分室	3
社会システム研究科		1
法学研究科		2
マネジメント研究科		9
合計		78

(3)各部局の取組状況

２０２５年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	外国語学部	学科等	英米学科

２．部局の実施方針、方法

英米学科では、授業の質の向上および教員間の相互研鑽を目的として、年間を通じてピアレビューを実施している。語学科目および文学・文化・観光・通訳等の専門科目を対象とし、学期ごとに授業参観と意見共有を行うことで、授業改善とFD活動の推進を図っている。

３．実施授業

No	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	No	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	英語科教育法III	1	16	11			
2	Language Learning	1	20	12			
3	Introduction to Comparative Culture	1	18	13			
4	British Studies	1	118	14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

2025年度のピアレビューを通じて、授業の到達目標が明確に示され、内容が段階的に構成されている点が評価された。特に、ディスカッションやプレゼンテーション、課題を通じて学生の主体的な参加を促す授業が多く見られ、学習意欲の向上につながっているとの意見が寄せられた。
また、教材や配布資料、スライド等については概ね工夫がなされており、内容理解を助けている一方で、学生の理解度や成果物の完成度に差が見られる場合もあり、指導や支援の工夫について検討の余地があるとの指摘もあった。さらに、専門分野の内容と英語運用を効果的に結びつけた授業実践については、実践的で有意義であるとの肯定的な評価が多く見られた。

５．成果と課題

ピアレビューを通じて、教員が自身の授業を客観的に振り返る機会が増え、授業改善への意識が高まった。学生参加型の授業やアクティブラーニングの実践が多く見られ、学習環境の充実につながっている。また、語学科目および専門科目の双方において、効果的な指導方法や授業運営の工夫について教員間で共有することができた。ピアレビューの実施を通じて得られた知見を、今後の授業改善やカリキュラムの検討により体系的に活用していくことが課題として挙げられる。

２０２５年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	外国語学部	学科等	中国学科

２．部局の実施方針、方法

中国学科では教員数が少ないため、ピアレビューは年1回（通常は2学期）実施する方針としている。基本的な進行手順は、①授業担当者と該当授業を決定する、②学科長、学科教員およびFD委員が授業に参加する、③FD委員が報告書を作成し、学科会議で審議するという流れである。

本年度は1年次担当の教員が授業を提供し、学科長、学科教員、FD委員計6人が参加した。授業終了後、担当教員による補充説明および参加教員からの感想・意見に基づいて、報告書を作成した。その後、学科内でのメール審議を経て報告書の修正を行った。

３．実施授業

No	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	No	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	中国語初級総合Ⅱ	6	17	11			
2				12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

・発音がきれいで、声が明瞭で大きく、聞き取りやすかった。
・学生への接し方や言葉遣いが大変丁寧だった。
・授業準備が丁寧に行われており、構成にも無駄がなく質の高い授業だった。
・簡体字の誤りについて：漢字の成り立ちや本来の意味、意味の拡張を関連づけて説明する。
・全体として教員による説明が中心の授業であるという印象だった。
・授業中の撮影音の発生や、集中が途切れるのを防げるために、説明内容の資料をMoodleで配布するのもいいかもしれない。
・授業中に声調を誤って発音し、そのまま学生に繰り返し聞かせた箇所があった。
・他教員が作成した資料を使用する際には、当該教員に確認を行う必要がある。

５．成果と課題

◆成果
・ピアレビューの実施を通して、授業担当教員およびその授業の構成・内容に関する特徴が明確になり、今後の授業づくりに資する知見が得られた。
・レビュアーにとっても、授業見学は有益な刺激となり、自身の授業を振り返る機会ともなった。
・資料使用の件については、当事者間で確認し、資料を使用しないこととした。今後は教員間で連絡を密に行い、資料使用の許可不許可を確認することとした。

２０２５年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	外国語学部	学科等	国際関係学科

２．部局の実施方針、方法

◆専門科目をレビューの対象と定め、原則として年２回にわたりピアレビューを実施すること。
◆講義の質向上に重点を置き、ピアレビューに臨むこと。
◆今後、非常勤講師に対しても、ピアレビューへの参加を促す。

３．実施授業

No	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	No	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	東南アジアの歴史と社会	2	126	7			
2	英米文化概論Ⅱ	1	93	8			
3				9			
4				10			
5				11			
6				12			

４．出された主な意見、コメント

・対象授業はいずれも、テーマ設定・構成・説明が概して明瞭で、授業運営の質が高いとの評価が得られた。とりわけ、授業の流れや論点の位置づけを適切に示すことで、受講者の理解を支えていた点が指摘された。
・PPTや配布資料の活用が効果的であり、概念・用語についても具体例を交えて丁寧に説明していた。また、小テストや課題の設計・基準提示など、学習到達度の可視化に資する工夫が確認された。
・改善提案として、配布資料・参考文献表記の体裁統一、出欠確認方法など事務的情報の明示、各回の要点整理（まとめ）の充実、ミニクイズ等の導入による集中度維持が挙げられた。加えて、映像資料利用時の著作権確認や機材トラブルへの備えなど、授業運営上のリスク管理の徹底も指摘された。

５．成果と課題

【成果】2025年度は学科方針に基づきピアレビューを実施し、授業設計・運営に関する具体的所見（長所の共有と改善提案）を得た。分かりやすい説明、資料提示の工夫、概念・用語の丁寧な整理、課題等を通じた学習到達度の可視化など、授業の質向上に資する実践が確認され、学科内で共有すべき知見が蓄積された。
【課題】ピアレビューの参加率が依然として低い状況が課題である。今後は、より積極的な参加を促進する取り組みが求められる。加えて、講義全体を参観する機会を確保することで、ピアレビュー活動をさらに有意義なものとすることが期待される。また、指摘事項の共有にとどまらず、次年度の改善へ確実に接続するためのフォローアップ（改善事例の共有等）を整備し、実効性を高める必要がある。

２０２５年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	経済学部	学科等	

２．部局の実施方針、方法

今年度は学科を問わず学部内のすべての講義（ゼミ・演習含む）をピアレビューの対象とし、ピアレビューを実施した。また、3名の新任教員と1名のベテラン教員のご協力を頂き、第1学期に中岡先生ご担当の「中国経済」と縄田先生ご担当の「財務会計論Ⅰ」、第2学期に田中先生ご担当の「マクロ経済学Ⅱ」と鳴海先生ご担当の「統計学入門」をオープン・ピアレビューの対象とした。1年間で約20件のピアレビュー報告書の提出があり、講義内容・教育方法に関して教員同士で学びあうよい機会となったと思われる。

３．実施授業

No	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	No	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	マクロ経済学入門	1	150	11			
2	財務会計論Ⅰ	2	40	12			
3	中国経済	3	40	13			
4	入門演習	6	300	14			
5	経済学特殊講義A	1	40	15			
6	統計学入門	3	100	16			
7	マクロ経済学Ⅱ	1	110	17			
8	ポスターセッション	2	40	18			
9				19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

全体を通して、授業は構成・説明・参加促進のいずれにおいても非常によく練られており、学習効果を高める多様な工夫が実践されていた。特にクイズ形式の活用や教員の体験をもとにした講義説明は、理解度の可視化と参加意欲の向上に大きく寄与していた。また、専門的な内容を経験に裏打ちされた具体的説明で学生の視点に落とし込む講義スタイルは、教育的にも多くの示唆を与えるものとなっていた。

５．成果と課題

授業は、丁寧な説明と具体例を交えた進め方により内容が理解しやすく、クイズの活用も学習意欲を高める効果的な工夫となっていた。学生の視点と専門的知見が自然に融合しており、全体として教育的に非常に充実した講義であった。講義運営の参考になる点が多く、今後の授業づくりに活かしたい示唆が得られた。課題としては、反転学習を前提とした事前学習などの導入などが考えられる。

２０２５年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	文学部	学科等	比較文化学科

２．部局の実施方針、方法

新任教員および着年数の浅い教員の授業を中心に実施している。特別講義等で外部講師を招聘した場合も、FDを兼ねてピアレビュー対象授業としている。

３．実施授業

No	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	No	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	比較文化入門Ⅰ	7	154	11			
2	比較文化入門Ⅰ（キャリア講座）	6	154	12			
3	比較宗教・思想	4	77	13			
4	文学部特別講座	9	301	14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

新任教員や着年数の浅い教員に対しては、全体の構成や技術面に関連したコメントが多く出され、いずれも高い評価であった。また、科目のコンセプトが正しく伝わっているか、授業のテーマ設定が適切かについてのコメントも出された。
入門の中に新設した「キャリア講座」については、学生に４年間の過ごし方をイメージさせることの有効性についての意見が出された。
外部講師を招聘した特別講座では、本学科教員とのコラボレーションに対するコメントが多かった。全体の構成や内容への評価は高かったが、配布資料の使い方についての指摘がいくつかあった。

５．成果と課題

新任教員に対するピアレビューは、学科の教育方針や授業のコンセプトを理解できているかを確認し、フィードバックする貴重な機会として機能している。パソコンの使用の仕方や学生へのフィードバック方法などの技術面で既存教員が学べる部分も多く、双方にとって良い刺激となっただろう。外部講師が登壇者に含まれる授業は、学科の肝である「文化」を普段とは異なる視点からとらえ直す良い機会となった。
今年度は例年よりも参加教員数が増えたがまだ十分とは言えない。今後の課題として、着年数の長い教員の授業改善などにも取り組むため、レビュー対象科目の拡大も考えられよう。

２０２５年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	文学部	学科等	人間関係学科

２．部局の実施方針、方法

学科の教育上の特色となる、多彩な分野から専門的な学びを得るために初年次教育で必要な研究にたいする基本的な考え方や、論理的な思考方法、文献検索の方法および研究方法について、初学者を対象としてどのような学びの機会を提供することができるか、そうした方針から活動を行った。活動では、オープンキャンパスでの高校生への「学び」への誘いと、初年次教育における研究入門をピアレビューの対象とした。

３．実施授業

No	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	No	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	オープンキャンパス模擬授業	4	120	11			
2	人間関係学演習A	2	80	12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

オープンキャンパス模擬授業では、思い込みと事実のズレを体験的に示す内容が高校生にも新鮮であり、挙手を用いた参加型の工夫によって学習者の思考が促されていた。文字や図は見やすく、専門性の高さも効果的に活かされていた。実験動画で驚きを喚起し、解説へとつなぐ授業展開も分かりやすかった。人間関係学演習Aでは、文献調査の方法や留意点、図書館スタッフへの相談方法など、ゼミ運営にも応用可能な実践的内容が多く、先行研究やフィールドワークの提示も有益であった。学生は体験を通して主体的に研究法を学び、身近な事象もデータになり得ることを理解していた。一方で、分析方法まで扱うには負担が大きく、ゼミで補う必要性も感じられた。

５．成果と課題

専門的な研究に初めてふれる初学者、あるいはまだ体験したことのない生徒にとってそのような研究の基本的な方法と同時に、その魅力をどのように伝えるのか、その点が本年度の活動の主たる課題であった。ピアレビューの内容からは、この活動に取り組んだ(科目を担当した)教員が、その点を周知しそれぞれの授業内容を入念に検討し、展開できたことがうかがえる。高度な研究に学生を導くことは、高等教育において最も必要な教育スキルであり、このことは学科の教育方針とも接続している。そのため、この課題は今後のFD活動においても継続して取り組むべきであると感じた。

２０２５年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	法学部	学科等	法律学科

２．部局の実施方針、方法

法学部では、法律学科と政策科学科から一名以上ずつ各学期に予め指定した教員の担当科目（合計4科目、教員4名）について他の教員による授業参観（ピアレビュー）を実施した。

３．実施授業

No	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	No	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	労働法Ⅰ	1	131	11			
2	家族法	2	50	12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

・導入部分では前回の講義のポイントが的確に押さえられていた。
・レジュメが詳細で分かりやすく、専門外の教員からの評価も高かった。
・話し方や話す速度についても、適切であると感じた。
・授業の進行速度が適切である。スライド1枚あたり5分程度で話が進められている。スライドを見る時間、条文を開いて理解する時間が十分確保されている。受講者の様子をよく観察しながら話されている。また重要な概念についてはある程度時間をかけて強調されており、内容にめりはりがある。
・抽象的な専門用語については、身近な例を用いて説明されており、親しみやすく感じられた。
・判例の紹介が適切に行われている。
・教科書の使用頻度が適切である。

５．成果と課題

法律学の分野では、抽象的内容について理解しなければならない部分が多く、そのために学習スタート段階で挫折する学生も多い。上記ピアレビュー実施授業はいずれも具体的な場面やケースを通じてさまざまな制度や概念等について分かりやすく解説されており、大変参考になる。また、法律の改正や最新の判例、議論の状況などを適宜講義の内容に反映していく必要があるが、これらの点についても、上記ピアレビュー実施授業では、十分に対応されていた。
今後はICTの活用が課題として残される。

２０２５年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	法学部	学科等	政策科学科

２．部局の実施方針、方法

■ 実施方針
学科内で積極的に授業参観を行い、フィードバックを通じて、参観者とピアレビュー対象者が互いに教授法の改善に務める。
■ 実施方法
ＦＤ委員もしくは政策科学科の教員１名以上が、政策科学科で提供する講義科目を参観し、科目担当教員の授業の進め方や、講義内容、履修者の受講態度等について確認を行い、科目担当者にフィードバックを行う。

３．実施授業

No	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	No	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	都市政策論	1	148	11			
2	地方自治論	1	112	12			
3	地域統合論	3	24	13			
4	演習Ⅰ	8	4	14			
5	政治過程論	3	68	15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

■ 科目担当者によって施された授業の工夫に関するコメント
・授業後に回収するコメントペーパーを事前に配布することで、受講生が授業を聞きながら、自らの考えを整理することを可能にしている
・過去の授業回で取り上げた内容との関係性を意識的に明示して授業が展開されていた
・『ここまでの説明で何を理解してほしいか』が示され、具体的な説明を通して何を理解しておくべきか整理して伝えている

■ 履修者の受講態度に関するコメント
・数理モデルの解説あたりから若干集中力が切れた学生がみられたが、導入部分や政治学史など、理論の背景や具体的な文脈が示された場面では、再び集中してノートを取る様子が観察された

５．成果と課題

ミドルレベルのＦＤ活動について、１学期は少数の教員で参観を行ったが、２学期は複数の教員が参加するよう参観人数を増加させた。これにより、専門の異なる参観者による多角的な視点で授業をレビューすることができた。また、ＦＤ委員が11月に日本高等教育開発協会主催「ファカルティ・ディベロッパー養成研修会＜初級編＞」を受講したことで知見を獲得し、共通の記入シート（授業観察記録用ワークシート）作成し、２学期の後半からは参観者に同シートを配布する形式に変更して、参観者の視点を合わせる工夫を施した。こうした取組みの積み重ねにより、学科内のＦＤ実施の気運を徐々に醸成することができたことは、今年度の成果と言える。

２０２５年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	地域創生学群	学科等	地域創生学類

２．部局の実施方針、方法

地域創生学群において重視している初年次教育に関連する科目（「地域創生の基礎Ⅰ・Ⅱ」「指導的実習Ⅰ・Ⅱ」等）において、各専任教員が相互にその内容、方法、スキルを学ぶことにより、質の高い教育を提供できるようにするため、これらの科目を中心にピアレビューの実施を働きかける。

３．実施授業

No	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	No	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	指導的実習A	8	125	11			
2	地域創生の基礎B	6	125	12			
3	指導的実習B	5	125	13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

発表形式やイベント性の工夫により、学生の主体性や発信力が促されていたとの声が多くあった。一方で、発表内容の質や学びの深さに差が見られ、フォーマットや振り返り方法の明確化が必要との指摘があった。評価の公平性、教員の関与のあり方、担任制の運用、会場環境や配属地域による負担の違いなど、制度面・運営面に関する意見も多く寄せられた。

５．成果と課題

地域FM実習は、1年を通じて地域と関わる学びを積み重ねる中で、学生の実践力や発信力を育む機会となり、発表形式の工夫や地域との連携も評価された。一方で、発表内容のばらつきや学びの言語化、評価基準や支援体制の明確化などに課題が見られた。会場環境や地域配属による負担の差にも配慮が必要であり、今後の制度設計・運営改善に活かしていくことが求められる。

２０２５年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	国際環境工学部	学科等	環境化学工学科

２．部局の実施方針、方法

新人教員（２名）と既存教員（２名）は授業公開を行う。第１学科全教員は年間を通じて授業公開あるいは授業参観を１回以上実施する。

３．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	物理化学A	5	75	11			
2	物理化学C	9	53	12			
3	化学工学B	5	57	13			
4	物理化学D	7	60	14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

・学科の教員が積極的にピアレビューに参加しており、授業の質向上に向けて意欲的に取り組んでいる姿勢がうかがえる。
・重点項目については、シートへのコメント入力のほか、メールで意見交換が行われることもあった。

５．成果と課題

・ピアレビューへ積極的に参加することで、授業全体の質の向上が期待される。
・板書やパワーポイント資料、丁寧な説明、適切なレベルの課題設定を重視している一方で、授業中における学生のアクティブラーニングへの取り組みについては、今後さらに工夫の余地があるように感じられた。

２０２５年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	国際環境工学部	学科等	機械システム工学科

２．部局の実施方針、方法

本年度の実施方針は，2024年度1・2学期の授業評価アンケートの結果をもとに、本学科の講義・演習・実習・実験を含む開講科目のうち、満足度の授業評価アンケートポイントが最も高かった上位科目を２０２５年度ピアレビュ―の対象として授業公開を行うこととした。全ての学科内教員が出席できるよう，各講義は２回実施した．また，１回目の講義に参加できなかった教員には２回目に参加できるよう案内した．

３．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	機械設計法Ⅱ（１回目）	9	45	11			
2	機械設計法Ⅱ（２回目）	1	45	12			
3	機械システム創造演習（１回目）	8	46	13			
4	機械システム創造演習（２回目）	2	46	14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

どの講義も授業方針や進行方法は，計画通りうまく進められており，授業内容の理解度向上や学生の興味を引くために様々な工夫が見られ，特にパワーポイントの活用方法，小テストによる理解度の確認方法，当日の授業の位置づけを最初に確認している等，良好なコメントが多かった．参観した講義の全てで，学生が興味を失わないように各教員の工夫が見て取れた．

５．成果と課題

基本的に公開された講義全てにおいて参加した学科内教員からの評価が高かった．今年度は満足度の授業評価アンケートポイントが最も高かった専門科目の講義を含め演習系の専門科目のピアレビューに力を入れた．専門科目の講義では，機械設計の関連授業との連動を図りながら，学生が積極的に参加している点を評価できる．演習系の専門科目では，機械制御に必要と思われるプログラミングの基礎知識を分かりやすく学生に伝えている点や，担当教員とEA，TAとの連携がうまくいっている点を評価できる．来年度に向けて，授業レベルを高度に維持するためにも，今後も授業改善の努力を怠らないことが重要と思われる．

２０２５年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	国際環境工学部	学科等	情報システム工学科

２．部局の実施方針、方法

新学部でのPBL授業の設計・運営に役立てることを目的に、現在開講中の演習科目・学生実験科目のピアレビューを実施する。

３．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	解析学Ⅰ	3	85	11			
2	複素関数論	2	88	12			
3	計算機演習Ⅰ	1	72	13			
4	情報システム工学実験Ⅰ	5	75	14			
5	情報システム工学実験Ⅲ	5	73	15			
6	計算機演習Ⅱ	2	77	16			
7	情報システム工学実験Ⅱ	4	74	17			
8				18			
9				19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

出された主な意見は、下記（一部抜粋）に示すように肯定的な意見が多く見られた。
・授業冒頭で前回内容の復習や当日の講義・実験の位置づけが明確に示されており、学生が学習内容を把握しやすい構成となっていた。
・Moodleを活用して講義資料や課題が事前に配布されており、予習・復習が行いやすい学習環境が整えられていた。
・スライド、板書、動画、実行画面の提示など視覚教材を効果的に活用し、内容理解を深める工夫が見られた。
・小テストや課題提出、演習を適切に取り入れ、学生の理解度を確認しながら授業を進めている点が評価された。
・段階的な課題設定や自由課題の導入により、学生の主体性や理解の深化を促す授業設計となっていた。

５．成果と課題

各授業において、重点項目を明確にしたうえで、視覚教材やICTの活用、段階的な課題設定など、学生の理解度向上を意図した工夫が多く確認された。一方で、演習時間の確保や学生の能動的参加をさらに促す仕組みの構築、教室環境や授業運営上の制約への対応など、今後の改善に向けた課題も明らかとなった。今後は、これらの課題を踏まえ、学生の主体的な学習を一層促す工夫や、環境条件を考慮した授業設計の改善を進めていくことが必要であると考えられる。また、本取組は、新学部におけるPBL授業の設計・運営を検討するうえで、担当教員およびピアレビュー参加者双方にとって有意義な機会となり、当学科の方針に沿った形で実施できたものと考えている。

２０２５年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	国際環境工学部	学科等	建築デザイン学科

２．部局の実施方針、方法

ここ数年において本学科は新任教員の着任や講義科目の担当替えを相次いで行っており、これまで学科として取り組んできた内容の継承や、問題意識の共有を兼ねて学科講座内の教員間を中心に双方の講義の取り組み方の確認を中心に実施した。公開講義は実験・演習系として、今年度は安全対策についても注意しながら相互に確認を行った。履修者の多い科目を中心に選定したが、試験的に履修者の少ない科目での講義スタイルの確認も兼ねてピアレビューを進めた。

３．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	見学WS演習	2	53	11			
2	環境工学実験	1	52	12			
3	設計製図Ⅲ	2	54	13			
4	建築材料実験	2	54	14			
5	環境設備演習	2	3	15			
6	建築材料実験	2	54	16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

各教員の取り組みに対して出された主なコメントとして以下が挙げられる。
・講義内容の説明において、適時学生が疑問点を持っていないかを確認し、内容の理解度について注意を払いながら丁寧に進行されていた
・学生のやり取りが十分にできており、いつでも質問を受け付けられ、理解度が確認できるようになっていた
・学生の理解度に応じて話すスピードを変えたり、適度な間を設けることによって、学生の集中力、理解度が高まるように適切に配慮していた
・過去の講義内容の復習を盛り込み、学生の理解度に応じた解説が行われていた
・十分な安全対策が講じられていた

５．成果と課題

多くの教員が重点項目として設定していたものは、「話す声が明瞭で…、講義を進めるスピードを学生にわかりやすいものとする」「一方的な講義ではなく、…学生とのやりとりを積極的に行う」であり、近年の学生の習熟度に合わせた講義のあり方を問う構成であった。各教員がこれらの項目に対して解決法を見出そうとしており、公開者と参観者の教員双方がその方法について認識しあえたことが成果と考えている。今後の課題は、実験・演習系科目以外での展開のさせ方や、学生の「やらされている感」を低減し、学生が主体的に取り組むための工夫を模索することとして位置づけている。

２０２５年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	国際環境工学部	学科等	生命工学科

２．部局の実施方針、方法

【方針】①新任教員（3名）の講義、実習科目に対してピアレビューを実施した。②2024年度授業アンケート評価下位10% ポイント3.5未満の該当者（1名）に対して、該当科目のピアレビューを実施した。

【方法】①については数名の教員でピアレビューを実施した。特に若手の准教授をＦＤ委員が指名する形をとり、他分野の講義状況を研修する機会を設けた。②については学部規定に従い、学科長、教員評価委員、FD委員に加え、他の教員を交えた客観的な評価を行った。

３．実施授業

Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	Ｎｏ	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	生物統計学	4	48	11			
2	生命工学基礎実習	3	48	12			
3	バイオシステム講究Ⅱ	1	15	13			
4	生物学	5	48	14			
5	生物化学	5	50	15			
6	生物情報学	7	45	16			
7	物理学	5	55	17			
8				18			
9				19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

【座学科目】どの講義も大変見やすいスライドであった。演習を入れるタイミングも大変効果的であり、また演習中は学生の取り組み状況を見回りながら丁寧な対応がなされており、多くの学生が講義に前向きに取り組んでいた。
【実習科目】実験に関する基本姿勢から各実習の注意点について細かな説明があった。各テーブルにEAやTAが付いていて、かなり細かい指示を与えながら安全な実習が展開されていた。また担当教員は全体を巡回することで、不測の事態に備えていたことも大変良かった。

５．成果と課題

・新任教員の担当科目については、学生の教育効果が最大限に引き出せるように、授業の構成、進め方、学生の理解度への配慮など、様々な観点からの工夫が見られた。これは参観した教員にとって良い研修の機会となった。
・授業評価ポイント3.5未満の科目については、難易度や進め方のスピードを改善した点は理解できた。一方レビューの大半の意見として、学科のカリキュラムツリーの中での位置づけと、他科目との接続を踏まえたシラバスの再構成の必要性が指摘された。教務委員、カリキュラム委員と連携して、客観的な視点から改善を図る必要が課題点として明らかとなった。

２０２５年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	基盤教育センター	学科等	

２．部局の実施方針、方法

実施方針：基盤教育センターでは、部門内の教員間で年1回のピアレビューを推奨している。
実施方法：①複数の教員が特定の教員（FD委員から依頼）の講義・演習を見学し、当該授業の内容について話し合い、FD委員がピアレビュー報告書を作成する。②各教員が個別に任意の講義・演習を見学してピアレビュー報告書を作成し、FD委員に提出する。

３．実施授業

No	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	No	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	哲学	2	100	11			
2	データサイエンス入門	3	101	12			
3	Communicative EnglishⅡ	1	29	13			
4	Communicative EnglishⅡ	1	24	14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

哲学：普遍的人権の講義は、配慮ある雰囲気作りとSlidoによる即時FBが秀逸で知的・論理的だった。
DS入門：丁寧な語りや双方向の対話、教材の質と導入は秀逸だが、後方の集中力欠如が課題だ。学生をどう巻き込むかは今後の検討課題である。
Communicative EnglishⅡ：対話と丁寧なフォローで実践力を養う圧迫感のない授業だった。学生への接し方や問いかけを自身の授業にも活かしたい。
Communicative EnglishⅡ：段階的なリスニング指導と対話で主体性を促進する授業だった。穏やかな雰囲気作りとグループ運営法は自身の授業にも活かしたい。

５．成果と課題

成果：ピアレビューでは講義における詳細な工夫が明らかになり、参加教員からは、それら評価する声が多く聞かれた。ピアレビューで得た授業改善に向けた知見は、各々が講義の中で活かしていくことができるものである。
課題：今年度より1年生対象の必修授業となった「データサイエンス入門」のピアレビューでは、1時間半の授業に集中できない学生への対策が課題として浮上している。

２０２５年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	基盤教育センター	学科等	ひびきの分室

２．部局の実施方針、方法

基盤教育センターひびきの分室では新任教員の教育活動を支援するために、英語教育科目のうち「実践英語」（1年次第1学期必修科目・TOEIC対策科目）をピアレビューの重点科目と指定し、新任教員自身が担当するクラスと他の教員が担当するクラスそれぞれを見学できるようにした。また、授業を見学した直後に時間を設け、授業者と参観者の間で授業中の活動について意見交換できるようにした。

３．実施授業

No	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	No	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	実践英語（化学1組）	2	20	11			
2	実践英語（生命2組）	4	18	12			
3	ビジネス日本語	1	2	13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

ピアレビュー重点科目「実践英語」では、分量の多い共通テキストを授業時間内でどう扱うかが注目された。Moodleで正答率の低い問題のみを解説する方法と、全問解説したうえで演習を取捨選択する方法が見られ、それぞれの長所が指摘された。一方で、演習が形骸化しないためには、学生に活動の目的や着目点を明確に示し、理解を深める指導が必要であるとの意見が多かった。「ビジネス日本語」では、メールの役割や重要性を説明した上で実践的な執筆指導を行っており、目的意識を伴わせた学びの好例であった。総じて、学習者に「活動の目的」を意識させる指導の重要性が共通点として浮かび上がった。

５．成果と課題

今年度は、新任教員の教育活動を支援するため「実践英語」をピアレビュー重点科目とし、新任教員が自他双方の授業を参観できる体制を整えた。授業後には30分程度の意見交換の場を設け、授業者は具体的なフィードバックを得るとともに、参観者同士も課題や疑問を共有する機会となった。組織的なFD活動として相互学習の場を制度化できた点は大きな成果である。今後は、意見交換の質向上や記録の蓄積など活動の体系化を進め、より実効性の高いピアレビューを継続していくことが求められる。

２０２５年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	社会システム研究科	学科等	

２．部局の実施方針、方法

社会システム研究科では、大学院での高度な研究に主体的に携わることのできる学生の研究意識を高めることを、本年度の目標とした。そのため、初年次の研究入門に当たる科目にて、論理的な思考や研究資料の検索方法、プレゼンテーションの技術および研究計画書の構想という実践的な内容を導入し、複数の教員が定期的に学生の課題の指導にあたった。

３．実施授業

No	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	No	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	社会システム総合概論	2	9	11			
2				12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

本企画は全体として構成が非常によく整理されており、大学院生が司会や進行を補助していた点も高く評価できる。三つのセッションに分けて実施され、学会発表に近い雰囲気の中で進行していた。質疑応答やディスカッションも内容に即した有意義なもので、参加者にとって学びの多い時間となった。後半の個別研究報告では、文化・科学・福祉といった異なる分野を横断しながら、社会的文脈や当事者の経験に着目する姿勢が共通して見られた。理論と具体的事例が適切に結び付けられ、問題提起も明確であり、理解しやすい構成と工夫によって学際的な学びを促す有意義な報告群であった。

５．成果と課題

大学院生が、研究上必要な基礎的なスキルを実践的に獲得することのできる機会を提供するための授業とし、そのために読む・書く・聞く・話すを総合的に実践できる授業として位置づけた。ピアレビューからは、この授業の目的が達成されていることが確認できた。大学院の初年次研究教育では、その後学生達が取り組むより専門的で、なおかつ多分野にわたる研究にいずれも共通するスキルをどのように開発していくかが課題となる。この点については、この授業を担当する他の教員やピアレビューに出席した教員たちと合同で取り組み続ける必要がある。

２０２５年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	法学研究科	学科等	

２．部局の実施方針、方法

■ 実施方針
研究科内で積極的に授業参観を行い、フィードバックを通じて、参観者とピアレビュー対象者が互いに教授法の改善に務める。
■ 実施方法
ＦＤ委員１名以上が、法学研究科が提供する講義科目を参観し、科目担当教員の授業の進め方や、講義内容、履修者の受講態度等について確認を行い、科目担当者にフィードバックを行う。

３．実施授業

No	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	No	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	行政学Ⅲ	1	1	11			
2	自治体政策論Ⅱ	1	1	12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

■ 科目担当者によって施された授業の工夫に関するコメント
・履修者から具体例を提示するように教員からフィードバックをするとともに、教員からも実践的な事例を用いて理論を説明することで、履修者が抽象的に理論を捉えるのではなく、具体的にイメージできるよう工夫が施されていた
・履修者に、専門外の教員に対して研究内容を説明させることを通じて、研究内容の問題点に履修者自身で気づくことができるように工夫を図っていた。
■ その他のコメント
・教員の話し方や議論の「補助線」の設定によって、履修者が議論しやすい環境を整えている
・履修者による研究内容の報告と教員による質問という対話形式の講義であり、調査の方法やデータの分析方法などについて、技術的なアドバイスが行われていた。

５．成果と課題

本年度の法学研究科の学生数は、２学年合わせて２名と少数であり、６限以降の時間帯での開講科目で実施しているため、ＦＤ活動も担当教員以外はＦＤ委員のみの参加となった。
また、履修者が１名であるのに対し、ＦＤで参加する教員が複数人となると、履修者の立場から考えれば、心理的な負担が大きいと考えられる。そのため、法学研究科のＦＤ活動については、少人数の参観者によるピアレビューを継続する必要があると考えられる。

２０２５年度　ピアレビュー報告書

１．部　局	学部等	マネジメント研究科	学科等	マネジメント専攻

２．部局の実施方針、方法

・基本的にどの講義も教員がお互いに自由に聴講できるという了解のもとで運営している。ただしマナーとしては、事前に担当教員に連絡することを申し合わせている。
・今年度のピアレビューは、FD委員2名が新任教員の担当講義および専任教員の新規授業を対象に実施した（FD委員担当講義は1名で実施）。
・ピアレビューの結果は研究科内で共有され、教育内容・方法の改善を図ることとしている。
・また、平成26年度からは、本ピアレビュー結果を授業アンケート結果とともに対象となった講義担当教員に送付することとしている。

３．実施授業

No	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）	No	授　業　名	参加教員（人）	学生数（人）
1	ビジネス法務	2	15	11			
2	環境ビジネス	2	6	12			
3	マネジメント特殊講義D	2	6	13			
4	地域ブランド戦略	2	8	14			
5	M＆Aと戦略的提携	2	3	15			
6	地域政策	2	5	16			
7	プロジェクト・ファシリテーション	1	11	17			
8	イノベーション戦略	2	7	18			
9	マネジメント特殊講義C	2	2	19			
10				20			

４．出された主な意見、コメント

・冒頭で本日の議題の前提を呈示し、その後に課題とスケジュールを示すことで、受講生が本日これから行うことを自然と共有できていた。
・作りこまれた資料をもとに、理路整然とした説明がされていた。様々なモデルやデータを用いながら、現状を分かりやすく説明していた。
・学生の個別プランに対して時間をかけて丁寧にフィードバックされていた。
・学生による発表それぞれについて、全体でディスカッションする時間が確保されていた。
・受講生はこれまでに講義で学んだことを活かして主体的に参加していた。
・穏やかな語り口で、落ち着いて聞くことができる。動画の適切な活用も有効。

５．成果と課題

・複数の授業で実施されていた前回の講義の振り返りは、前回の復習と今回への橋渡しを兼ねて非常に有効であった。
・どの講義でも、教員と受講生との適度な双方向性が見られ、受講生の参加意識も高かった。
・（グループワークの際に）学生の座席位置は固定化しがちであり、グループのメンバーも物理的に分けると固定しがちであるため、毎回班分けはシャッフルされるよう考慮した方がよい。
・（遠隔講義で）学生の受講通信環境に考慮して教員含め全員が動画ミュートとなっていたため、話が入ってきにくく感じた。教員のみ動画をオンにしてはどうか。
・（ハイブリッド講義で）遠隔での受講者が議論にうまく参加できていなかった。
・学生による発表や演習などの講義展開の節目では、教員がフィードバック（コメント等）を心がけた方がよい。

第４章

2025 年度 特集記事

2025 特集

新カリキュラムにおける特色ある科目

取材・編集　2025 年度 FD 委員会　FD 活動広報ワーキンググループ

Rodger Williamson（外）・門田彩（文）・濱野健（文）・高木超（法）
井田浩之（基盤教育センター）・植田正暢（基盤教育センターひびきの分室）

[学生の異文化体験から主体的な学びを育てる]
柴田弓子　講師　（外国語学部英米学科）
担当: Overseas Study: Theory and Design
履修者：1年生 147名
記載日：2025年12月24日（水）
FD委員：Rodger Williamson

この授業の紹介をお願いします。
本コースは、海外学習のみならず国内における国際交流や異文化協働の学びを理論と実践の両面から理解することを目的とします。授業では国際的な学習を取り巻く背景を踏まえつつ、異文化との関わりを学生が経験を振り返り、その意味を考察できる力の育成を図ります。

この授業で重視していることはどのような点でしょうか？
本授業では、国際的な学習に関する基礎知識に加え、経験を振り返り、意味づけ、言語化する力を大切にしています。例えば、海外学習プログラムに参加する場合であれば、現地に行くこと自体を目的とするのではなく、学生自身が主体的に学びをデザインする力を養うことを目指しています。

この授業で学生に身につけてほしい知識や能力はどのようなことでしょうか？
初年次教育の一環として、大学における国際的な学びへの取り組み方を意識しています。与えられた情報をそのまま受け取るのではなく、自分にとって必要な情報を整理し、見通しをもって学習や活動計画を立てる力を身につけることも大切です。また、授業内での対話や発表を通じて、自分の考えを言葉にし、他者に伝える経験を積むことで、言語化する力を身につけてほしいと考えています。

学生たちの学習意欲を向上させるために、どのような工夫や動機付けを行っていますか？
講義に加えて、世界を舞台に活躍している人々のインタビュー記事（英語）の紹介や卒業生によるゲストレクチャー、海外学習を経験した在学生による体験談を取り入れ、学生が具体的な事例に触れながら考える機会を設けています。また、異文化間コミュニケーションや危機管理の授業回については、ケーススタディを取り入れ、異なる環境の中で生じやすい場面ややり取りを想定しながら、どのような判断や対応が考えられるのかを検討します。実際の場面での行動につなげられるよう、学生同士の対話を通して気づきを深める活動を行っています。

授業においてどのような難しさや、難しさを克服するためにどのような工夫を行っていますか？
海外学習に対する捉え方や語学力には個人差があるため、ディスカッションやケーススタディではペアやグループでの活動を多く取り入れ、緊張を和らげて取り組みやすくしています。また、在学生や卒業生の体験談を紹介する際には、先輩が海外学習プログラムへの参加に至るまでの各段階でどのような不安や課題があり、それらのハードルをどのように乗り越えてきたのかに焦点を当てています。先輩の経験を通して、国際的な学びを具体的にイメージし、次の一歩を考えられるように意識しています。

授業を通じて見られた学生の変化や成長はありますか？
最終のグループ発表やレポートでは、自身の課題も含めて学習・活動計画や考えを整理し、言葉にしようとする姿が見られ、学生が自律的に学びを捉えようとする姿勢の変化を感じています。また、授業を

きっかけに、北九州チャンピオンズカップ国際車いすバスケットボール大会の選手帯同ボランティアなどの学外活動に応募し、初年次から積極的に活動に従事する学生も見られるようになりました。国際的な学びに対する距離感が縮まり、身近な取り組みとして考えるようになったのではないかと思います。

得られたFDに関する知見について（FD委員記載）

本授業を実施して得られた重要な知見の一つは、海外学習をカリキュラムの中核に位置づける上で、学生に対する教育的観点からの丁寧なガイダンスが不可欠であるという点です。英米学科において海外学習は卒業要件に結びつく重要な学びであり、事務的な説明にとどまらず、学習としての意義や目的を理解させる支援が求められます。

本授業は、手続き的・管理的な支援とは異なり、振り返りや意味づけ、学習のデザインに焦点を当てた指導を行っている点に特色があります。学生が自身の目標や不安を言語化しながら学びを整理することで、国際的な学習に対する心理的なハードルが下がり、自信をもって次の一歩を踏み出す姿勢が育まれていると感じられました。その結果、学生は英米学科において卒業単位として認定される海外学習や関連活動に対して、より主体的かつ意欲的に臨めるようになっており、海外学習を学部教育全体の中で意味ある学びとして位置づける上で有効な教育実践であると評価できます。

［学びの基礎からキャリア育成につなぐ］

真鍋昌賢教授、山口裕子教授、齋藤公太准教授（文学部比較文化学科）
担当：比較文化入門Ｉ・比較文化入門２
記載日：2026 年 I 月 26 日（月）
FD 委員：門田彩

この授業の紹介をお願いします。

比較文化入門Ｉ、２は、Ｉ年次Ｉ学期と２年次２学期の科目で、旧カリキュラムの同名科目をベースに新カリキュラム用にリニューアルした授業です。新カリキュラムとしての入門２は、次年度開講ということになります。講義形式と少人数のクラスセミナーからなります。講義では、文化資源、文化共生という文化を捉えるための二つの切り口を、各教員の専門に関わる基礎的な知識や魅力とともにオムニバス方式で学びます。クラスセミナーでは図書館の活用法やレポートの書き方、プレゼンテーションの仕方を実践的に学びます。2025 年度からは、「キャリア」について考える講義回を創設しました 。

この授業で重視していることは、どのような点でしょうか？

初学者教育の充実を目的としており、大学生として「学ぶ」上で必要な基礎的な能力を実践的に身につけてもらいます。特に、進級への滑らかな接続とキャリア講座の充実を重視しています。これにより、３年次からの演習（ゼミ）や卒業論文作成へとつなげることが狙いです。新設した「キャリア講座」回では、本学のキャリアカウンセラーや学科教員が登壇し、日々の学びが卒業後の人生（＝キャリア）を切り開く最大のカギであることを講義しました。近年は多くの学生が、低学年の頃から就活に対して漠然と不安を抱いています。将来を過度に不安視することなく、目の前の学業に集中し、様々な経験を通して大学生活を充実させられるように、履修計画やゼミ選択、取得可能な資格、留学、各種セミナーなど、大学が提供する多様な選択肢を説明しました。

　その他、学科教員でワーキングを作り、来年度以降の本格的な新カリキュラムプログラムに向けて準備を進めているところです。

この授業で学生に身につけてほしい知識や能力はどのようなことでしょうか？

人文学的な教養の習得と、発信技術の徹底です。具体的には、情報を収集、分析する基礎力、物事を多面的に捉え論理的に思考し、自分の考えや判断を適切な方法で表現する力などを身につけてほしいです。近年学びの現場に導入され始めた生成 AI についても、それが出してくる情報を評価し判断する力を涵養したいです。比文で学ぶことは、明確な答えがないことがほとんどです。答えのない問いに向き合い、それを楽しむ力は、社会に出てからも活かされると思います。今後ますます AI 時代に入っていくと思いますが、基本的な手作業の技も習得すべきと考えています。

学生たちの学習意欲を向上させるために、どのような授業や指導の工夫を行っていますか？

双方向性を重視しています。レポートやプレゼンに対して教員が指導することはもちろん、学生同士の議論やレビューによる学び合いも大切です。また、比文の授業は、分野も地域も非常にバラエティに富んでいます。学生には異なる授業同士を関連づけ、一見異なるトピックの間に共通するテーマや、反対に、似たようなテーマの間の微細な差異などを発見していくことを意識するように指導しています。入門２に新設するテーマ「比較文化のひろがり」では、領域のつながりを意識してもらう工夫として、分野の異なる２名の教員による講義の回を設けます。本年度は旧カリキュラム版のなかで先行的な実施をすでに行いました。またキャリア回では、講義の最後に、学生に自身のキャリアパスを考えるワークシートを作成させて、後日キャリアカウンセラーがフィードバックしました。

授業において、どのような難しさがあり、それを克服するためにどのような工夫を行っていますか？
学んだことの定着が課題です。入門１は１年１学期、入門２は２年の２学期に開講するため、間が空きます。開講期の前後などに、重要なことを繰り返し振り返る機会をつくれるよう心がけています。

また、学生は普段、さまざまな分野の講義をそれぞれ別々なものとして聴講していますが、それぞれの専門が実は繋がっていると分かるように、２名教員による講義である「比較文化のひろがり」では、一般的な講義形式ではなく、おしゃべりの雰囲気を演出した対話形式を採用し、ライブ感をもった授業を行います。本年度の先行的な実施を経て、学生の参加を授業にいかに組み込むかという課題を得ました。次年度のアップデートにむけて方策を練りたいと思います。

得られたFDに関する知見について（FD委員記載）
有意義な学生生活を送るための第一歩として、初年次教育の重要性を改めて確認し、本科目の位置づけを再認識した。本学科で学ぶ学生に身につけて欲しい力、つまり、収集した情報を自分で分析し論理的に思考する力や、様々な知識を駆使して自ら文章にする力を養うために、本科目が果たす役割は非常に大きいと感じた。
講義形式の授業の際、事前に学生への質問事項をいくつか準備したり、応答しやすい呼びかけ方やフィードバック方法を考えておいたり等、双方向性をいかに実現していくかが今後の課題となるだろう。次年度からの本格始動に向けての課題を見出すこともでき、有意義な授業となった。

[初年次から学びの軸をつくる―人間関係学演習A・B]

上田紋佳准教授・金汝卿准教授・大江將貴准教授（文学部人間関係学科）

担当：人間関係学演習A（上田・金）・人間関係学演習B（大江）

記載日：2026年1月14日(水)

FD委員：濱野健

〇人間関係学演習A（1年次・必修）：研究への入口としての初年次演習
この授業の紹介をお願いします。

上田：演習Aは初年次教育として位置づけています。目的は、レポート作成、図書館利用、文献検索といったアカデミックスキルを身につけてもらうことに加えて、「研究とは何か」を実感として理解してもらうことです。授業後半では、研究法の基礎を演習形式で扱い、量的研究を中心に研究の考え方に触れてもらいました。

金：実際の授業では、論文検索、質的・量的調査の違い、参与観察、インタビュー調査、調査倫理などを段階的に体験してもらいました。特にインタビュー演習は学生の反応が非常に良く、「新鮮だった」「今までにない授業だった」という声が多かったです。

課題として感じている点はありますか？

上田：レポートの添削やフィードバックを十分に行えなかった点です。引用の仕方を繰り返し指導することで書けるようにはなりますが、個別に返すにはマンパワーの問題があります。また、研究法の学びを、今後どの段階でどう活かしていくのか、カリキュラム全体で整理する必要も感じています。

〇人間関係学演習B（2年次・必修）：ゼミ選択とキャリアをつなぐ演習
この授業の紹介をお願いします。

大江：前半はゼミ選択ガイダンス、後半はキャリア形成をテーマにしています。

キャリアに関する取り組みはいかがでしたか？

大江：外部講師や卒業生に協力してもらいました。特に卒業後間もない卒業生の回は、学生にとってリアリティが高く、最も好評でした。一方で、企業研究を外部に依頼すると宣伝色が強くなるという課題もあり、キャリアセンターとの連携なども今後の検討課題です。

濱野：ゼミ選択とキャリアをどう結びつけるかも重要ですね。

大江：今年は、「5年後、10年後の自分をどう考えるか」から逆算してゼミを考えるワークショップも試しました。学生の多くが「人とコミュニケーションがうまく取れるようになりたい」と書いており、人間関係学科らしい関心のあり方がよく表れていました。

演習A・Bを通して、学科全体のカリキュラムとの関係について、どのような可能性が見えてきたでしょうか？

上田：研究法を1年次から導入することは、専門研究の準備だけでなく、物事を一歩引いて考える視点を育てる点で意義があります。概論や専門科目、実験実習との接続を意識した段階的な設計ができれば、学生の理解はさらに深まると思います。

金：ゼミに入ってから「論文の読み方が分からない」「レジュメが作れない」という声は多いので、そ

の前段階で基本的なスキルを養う仕組みは必要です。演習A・Bは、その役割を担える可能性があります。
大江：演習Bでは、学生が「自分は何を学んできたのか」を言葉にする場面が増えました。これは就職や進路だけでなく、学科で学ぶ意味を自覚することにもつながると思います。
濱野：人間関係学演習A・Bは、これまで目的が見えにくかった演習を、学科カリキュラムの中核として再定義する試みであったといえます。初年次から研究に触れ、2年次で学びと進路を結びつけるこれらの演習は、今後のカリキュラム発展を考える上で重要な手がかりを与えてくれました。先生方、ありがとうございました。

得られたFDに関する知見について（FD委員記載）
人間関係学演習A・Bは、新カリキュラムの中で「学びの意味を学生自身が理解する」ことを目指した意欲的な科目である。初年次から研究法を体験的に導入し、2年次にはゼミ選択やキャリアと接続する構成は、担当教員の丁寧な実践の成果といえる。本インタビューからは、人間関係学科の学生がもつ高い思考力や粘り強さが、これらの演習を通じてさらに伸びる可能性が確認された。今後、学科全体との連携が進めば、本科目は学科の強みを内外に示す中核的な存在となるであろう。

［グループでの学びから政策研究の基礎力を磨く］

高木超准教授（法学部政策科学科）
担当：政策実践プロジェクトⅠ
記載日：2025年12月9日（火）
FD委員：高木超

この授業の紹介をお願いします。
この授業は、グループ単位で公共的問題を調査・分析し、調査結果をまとめ、発表するまでの一連の手順について、実践を通じて理解・習得することを目的とします。履修者の関心に応じて、学外でのフィールド調査を行うため、対象地が遠距離の場合は宿泊を伴う場合があります。2025年度の高木ゼミでは京都府亀岡市にて1泊2日の合宿形式で実施しました。

この授業で重視していることは、どのような点でしょうか？
政策科学科は公務員志望の学生も多いので、政府・自治体の現場で職員の方々が活躍されている姿を実際に見て、行政実務の厳しさと楽しさの両面を感じてもらうことを意識しています。同時に、公共政策に関与する主体は行政だけではないので、自治体と連携して公共的問題の解決に取り組む企業・団体の方々も、授業内のゲストスピーカーなどの形式で話題提供をいただけるよう意識して実施内容を考えています。そうすることで、公務員志望の学生以外も「公共的問題の解決には、企業・団体の立場からこういった関わりができるのか」と感じてもらうことができます。

この授業で学生に身につけてほしい知識や能力はどのようなことでしょうか？
（1）政策研究に必要な情報を収集する技能と、（2）公共的問題の解決や研究を遂行する主体的な行動力を身につけてほしいと考えています。これらの能力は、いずれも学内での座学だけで身に着くものではありません。実際に現場に足を運び、自らの研究に必要なデータを学生自身が見つけたり、学外の研究対象者とコミュニケーションを取りながら、データを収集したりする必要があります。
例えば、本年度は亀岡市の環境発信拠点「Circular Kameoka Lab」を舞台に、①食品ロスを削減するレシピ等の開発、②亀岡市の環境政策及びラボの発信方法の提案、③「食」以外の継続的な集客方法の提案を成果として発表すべく、参加者は3つのグループにわかれて内容を検討しました。このように教員が「求められる成果」までの提示に留めたところ、学生同士で議論しながら、積極的に関係者にヒアリング調査を行う様子が見られました。

学生たちの学習意欲を向上させるために、どのような活動を行っていますか？
他大学（今回は、立命館大学食マネジメント学部）と合同で実施することで、教員が一方的に研究手法を教えるのではなく、同年代の学生から学ぶ環境を整えるよう工夫しています。例えば、アンケート調査を実施する際に、プレ調査（プリテスト）を実施して、その結果をもとに設問等を改善して本調査を行う――といった具体的な方法を同年代の学生の研究発表から知ることで、自身の研究能力の向上につなげ、切磋琢磨するようになる効果があったと感じています。

授業において、どのような難しさがあり、それを克服するためにどのような工夫を行っていますか？
他大学と合同で行うことで、距離的な制約（立命館大学側は滋賀県に所在）から、頻繁に対面で会って議論することが難しい点が挙げられます。そこで今回は、合宿の開催に先立って、両ゼミの学生、

教員、亀岡市職員がオンラインで集まり、事前学習の機会を設けた後、現地での活動に移りました。このようにICTを積極的に活用することで、参加者の問題意識を揃えたり、事前準備に取り組む時間を確保できたりするなど、限られた時間を有効活用できる工夫を施しています。

得られたFDに関する知見について（FD委員記載）

実際に授業を実施して感じたのは、同年代の学生から得られる刺激や相互の学び合いの効果です。特に、自身よりも年齢が若い学生（例えば、学部1年生）の研究発表が、学部2年生・3年生の自分たちよりも技能や研究手法に習熟していたら「自分たちも負けていられない」と、成長に欠かせない刺激を得ることもできるでしょう。これは教員から一方的に「教わる」ことでは得られない「ピア・ラーニング」の効果だと感じました。

［アカデミック・リテラシーからの「基盤力」の育成にむけて］

神原ゆうこ教授・中尾泰士教授・藤田俊准教授・渡辺翔平准教授（基盤教育センター）
担当「アカデミック・リテラシー」
記載日：2026 年 1 月 28 日（水）
FD 委員：井田浩之

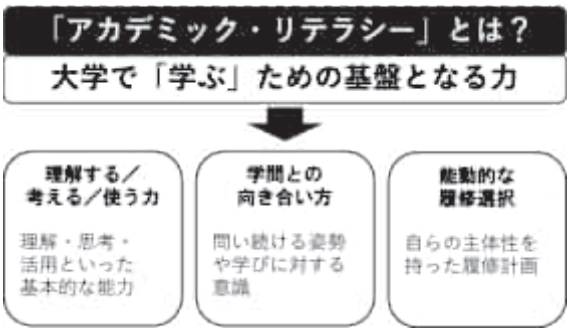
基盤教育センターでは、2025 年度より「アカデミック・リテラシー」を開講しました。本センターでは、これまで本学学生が教養課程を通して身につけるコンピテンスを「基盤力」と定義してきました。これは初年次教育のような狭義の学びにとどまるものではなく、大学生として、さらには大学卒業後も生涯にわたり学び続けるために必要な技術や思考の要件となります。そのための手ほどきが、「アカデミック・リテラシー」です。

この授業の紹介をお願いします。

神原：基盤教育センターでは、学部によって初年次教育の状況が異なる本学の状況をふまえ、スムーズに高校の学習から大学での学習へ移行できるよう、旧カリキュラム（2019 年～）より必修科目「アカデミック・スキルズⅠ」を設置しました。この科目は、LMS の使い方をはじめとした大学で必要な学習スキルの獲得を通して、考える力の養成を目指すものでしたが、高校の指導要領の変化、より多様化する学生のニーズをふまえたアップデートの必要がありました。新カリキュラムでは、新入生が基盤教育センター提供の科目をはじめとした 1 年次対象の授業を、スムーズに履修することが可能となるために必要なスキルを学ぶことは踏襲しつつ、その後の学びのために大学生として必要な考える力をしっかりと養う「アカデミック・リテラシー」（1 学期）と、分野を超えてコミュニケーションをとりながら、より高度な考える力を養う「アカデミック・スタディーズ」（2 学期）などを、選択必修として提供することにしました。

基盤教育センターが提供する基盤教育科目は、全学の学生の学習の質保証のため、５つの DP を偏りなく履修することが求められています。多くの学生が 1 年次 1 学期に履修する「アカデミック・リテラシー」は全学的に低学年の履修科目で扱われにくい「コミュニケーション力（DP4）」を重視した科目です。新カリキュラム以降、異なる学部の学生が混ざり合うクラスとなったので、新入生が学部を超えて刺激を与え合うことを期待しています。

この授業の特色について教えてください



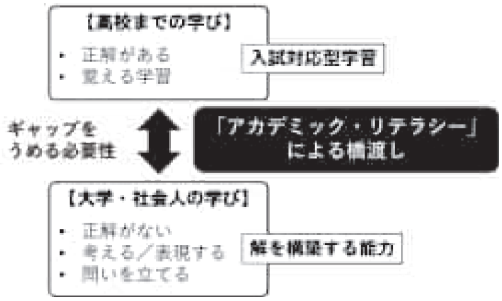
中尾：基盤教育センターが担う初年次教育において、2024 年度まで必修科目であった「アカデミック・スキルズⅠ」は、2025 年度開始の新カリキュラムより「アカデミック・リテラシー」と名称を改め、選択必修科目として開講されてきました。

この変更のみを見ると、当該科目の重要性が低下したかのような印象を与える可能性があります。しかし、従来の「スキル（技法）」修得を想起させる名称から、「ただ知っているだけではなく、理解し、考え、使える力」を意味する「リテラシー」を冠する名称へ変更したことで、本科目が、学ぶことの本質や学問との向き合い方を身につけるための科目であるというメッセージをより明確に学生へ伝えられるようになったと考えています。

また、各担当教員が提示するシラバス内容と学生自身の自己分析に基づいて履修を選択する仕組みへ移行したことで、学生の学修意欲を高めるとともに、教員側にとっても教育効果の向上が期待されます。

授業からどのような課題を感じましたか？

大学、さらには社会における学びでは、明確な正解のある課題はむしろ少ない。必要な情報を収集し、自ら考え、暫定的であっても自分なりの解を構築し、それを適切な形で他者に伝える力が求められます。加えて、自ら問いを立てる姿勢も重要である。高校までの「覚える学習」から、生涯にわたり「考え続ける態度」へと早期に転換するきっかけを与えることが、大学初年次教育の重要な役割であると考えます。



このような理念のもとで「アカデミック・リテラシー」は開講されていますが、必修科目でなくなったことにより、履修者数の予測が難しくなっています（2025年度実績：登録者数988名）。今後も新入生オリエンテーション等を通じて本科目の意義を継続的に発信するとともに、授業内容の充実を図り、受講生に「履修してよかった」と実感してもらえるような科目運営が重要だと考えています。

また、複数教員が担当することに伴う課題として、時間割配置、授業内容および難易度の調整、成績評価分布の適正化などが挙げられます。これらについては、「アカデミック・リテラシー」担当者会議を適宜開催し、意見交換と合意形成を図っています。

授業の手応えについて教えてください

藤田：前半はMoodleの利用方法、メールの書き方、剽窃と引用などの「大学での学び方」に関する講義・演習を行い、学生の大学順応をサポートしました。資料のダウンロードや課題提出に欠かせないMoodleについて学生からは、本授業で扱う前に他授業で利用が求められる事例（2年生以上も履修する講義授業での課題提出など）が複数報告されました。前身の「アカデミック・スキルズ」と異なり本科目が必修でないことに鑑み、初年次教育に関する各学部との連携の必要性を感じました。

後半では学びの根幹である「考える力」の涵養を目指し、アクティブラーニング形式の授業を取り入れました。「ミニ・シンポジウム」に向けたグループ発表の準備と質疑応答への参加を通じ、初学者である1年生に「大学での学び」の一端（調査・分析・発表）を体験させることができました。さらに、初めて触れる知識に対して、自分の中にある知識・経験などを総動員して疑問や意見を投げかける経験を積ませることもできました。

渡辺：本科目の意義は、新入生が大学での学習と生活に適応する一助になる点だと考えます。細かな内容は担当教員によって異なりますが、図書館・office・Moodleの使い方や資料・メールの書き方などを学べるほか、異なる学部や学科の同級生と交流する機会にもなる点が意義深いと思います。かつて他大学の1年生だった私も類似科目を受講しましたが、本科目はより実践的な設計であり、また専門が異なる複数の専任教員が様々な曜日と時間帯に開講しているため新入生が主体的に履修科目や学生生活を計画できる点でもポジティブです。

次年度以降の課題としては、専門教育との接続が挙げられます。旧カリキュラムでは必修だった本科目（旧科目名：アカデミック・スキルズ）が選択科目となり、全学生が基礎的なことを一度は学んでいるという前提がなくなりました。この影響については各学部の先生方のご意見をふまえながら検討する必要があると思われます。

得られたFDに関する知見について（FD委員記載）

基盤教育センターでは「いまさらアカデミック・リテラシー？　いや今こそ、アカデミック・リテラシー！」という気概を持った、センター長、科目統括、そして担当者がおり、このような共通認識を持っていることが窺い知れます。今回のFD報告書を一種のマニフェストとしたうえで、次年度以降も継続して科目を発展させていきたいと考えております。

［早期インターンシップを通したキャリア形成と自立性育成の教育実践］

石川敬之教授（基盤教育センターひびきの分室）
担当「インターンシップ実習」
記載日：2026 年 1 月 28 日（水）
FD 委員：植田正暢

基盤教育センターひびきの分室が国際環境工学部生に提供する基盤教育科目は、2025 年度の新カリキュラムから科目区分が細分化され、「キャリア・アントレプレナーシップ科目」が新設されました。その中で 1 年生向けに開講されている「インターンシップ実習」について、担当の石川敬之先生に授業運営の取り組みについて伺いました。

この授業の紹介をお願いします。

「インターンシップ実習」は、北九州活性化協議会と連携し、地元企業で実務経験を積む機会を提供している科目です。これまではプログラムとして位置づけられていましたが、新カリキュラムから正式に科目化され、単位として認められるようになりました。1 年生から履修でき、夏休みに 5 日間のインターンシップに参加し、その経験をもとに後期で成果発表を行います。受講した学生からは「インターンシップへの心理的なハードルが下がり、今後の就職活動に前向きな気持ちを持つことができました」という声が寄せられていました。

授業運営で大切にしている点はどのようなことでしょうか？

最も重視しているのは、学生自身のコミットメントを高めることです。自分で決定に関わることで責任感が生まれ、やる気にもつながると考えています。意欲の高い学生が多いので、厳しく指導するというより、学生を一人の大人として扱い、伴走するような姿勢で接しています。

ただし、エントリー段階ではあえて負荷をかけています。企業で実際に学ぶわけですから、一定の目的意識を持って臨んでほしいからです。その結果、目的意識の高い学生が参加し、学生だけでなく、企業側・教員側の満足度も高い授業になっています。

学生にどのような力を身につけてほしいと考えていますか？

1 年生のうちからインターンシップに参加することで、学部・学科での学びが社会とどうつながるのかを早い段階で理解してほしいと考えています。大学での学びが社会のどこで活きているのかを実際に見たり経験したりすることで、自分の居場所や将来像がイメージしやすくなります。その経験をもとに、卒業後のライフキャリアを描くきっかけにしてもらうことを期待しています。

学習意欲を高めるために、どのような工夫をされていますか？

この科目は後期開講ですが、インターンシップは夏休みに行われます。そのため、4 月のガイダンス後は学生と私、学生と企業のメールでのやり取りが中心になります。私は「インターンシップに参加したら一社会人として振る舞う必要がある」という意識を繰り返し伝え、学生と企業のやりとりも確認しながら、次にすべきことや注意点を個別にメールで指導してきました。

学生の自主性は尊重しますが、やはり学生は学生ですので、企業に失礼がないように見守りながら、見えないところできちんとフォローしています。インターンシップ後は成果発表会を行い、やりっぱな

しにせず経験を振り返ります。発表準備の段階で資料を見ながら話をする中で、学生がまだ表現しきれていない学びを丁寧に引き出すように心がけています。

学生に社会人としての自覚を持たせるための工夫はありますか？

学生には「インターンシップに参加したら学生でも一社会人である」ということを繰り返し伝えてきました。「学生だからこの程度でいい」という考えは通用しないことを自覚してもらうためです。メールで一人ひとりとやり取りをしていたので、やるべきことを曖昧にせず、具体的に文面で示すことを徹底しました。文章として残るからこそ理解しやすく、口頭で伝えるよりしっかり受け取ってくれたのではないかと感じています。

得られたFDに関する知見について（FD委員記載）

自立性を育てる教育の重要性は共有されていますが、実際の授業で実践することは容易ではありません。今回のインタビューでは、石川先生が「学生自身のコミットメントを高める」ことを重視されており、この点が自立的な学びにつながる鍵であると感じました。

「インターンシップ実習」では、一人ひとりの学生と丁寧に向き合い、対話を重ねているからこそ、学生の学びを的確に見取り、学生の自立した学びを誘う指導につなげているのだと実感しました。

理想的には「インターンシップ実習」のように、一人ひとりに丁寧に関わることが望ましいものの、大人数科目では同じ形での個別対応は難しい場合があります。そのため、学生の主体性を引き出す工夫を、授業全体の仕組みとしてどう組み込むかが重要だと思われます。

石川先生のお話の中で、別の授業での例ではありますが、学生にグループの分け方を考えさせ、複数案が出た場合には学生同士で合意形成を行わせるという実践が紹介されました。自分たちで決めたという感覚が、活動への参加意欲や納得感を高めるという点が印象的でした。

このように、学生自身のコミットメントを高める仕掛けを授業の中に取り入れることは、アクティブラーニングの質を高める上でも大切な視点だと感じました。

第５章

FD 委員会について

(1)活動概要

今年度、FD 委員会に設けられた 3 つのワーキング・グループ（以下、WG）の活動は以下の通りである。

研修 WG では、本学におけるアクティブラーニングの推進、事前事後学習の確保、教育アセスメントの実施を主な目的に掲げて、全学研修を 4 件実施した。①「春季新任教員 FD 研修」（対象：新任教員、4/3 開催）、②「夏季新任教員 FD 研修」（対象：新任教員、8/25 開催）、③第 1 回全学 FD 研修「教学 IR と教育改善のためのデータ活用～志願動向と入学者アセスメント」（対象：全教員・必修、9/22～10/31 遠隔方式で開催）、④第 2 回全学 FD 研修「アントレプレナーシップ教育」（対象：全教員・必修、10/22 開催）の計 4 件の研修の企画・実施を行った。これらの研修の報告は、第 2 章「FD 研修報告」を参照されたい。

FD 活動広報 WG では、2025 年度から新カリキュラムが全面導入されたことを受け、FD 活動報告書（2025 年度版）第 4 章にて、新カリキュラムの理念を具体的に反映した各学部・学群の特色ある教育実践を特集として掲載した。本 WG メンバーが当該特集ページの企画・取材・執筆を担当し、新カリキュラム初年度という重要な節目において、カリキュラム改革特徴が実際の教育活動として現れている新科目や授業実践に焦点を当てた。具体的には、学部横断型科目の新設とその運用、実践科目・演習科目の再編とそれに関連した学修支援の工夫、初年次教育および基礎科目の改善などを取り上げた。これらの事例を通じて、各学部・学群における教育上の狙いや実施体制、学生の学修経験への影響を整理し、新カリキュラムが教育実践にもたらしうる意義と今後の展開可能性を報告した。

授業評価 WG では、昨年度の授業評価アンケートの質問項目を元に、今年度も着実に授業評価を実施してきた。今年度は、各方面から寄せられた様々な意見や要望について、ワーキンググループ会議、および、FD 委員会で検討を重ねた。とりわけ、他の大学の授業アンケートの内容と実施方法について、情報を共有し、長期スパンでの検討の材料とした。今後は、予算と技術的な可能性も視野に入れながら、具体的にどのような機能を授業アンケートシステムに付加してゆくべきなのかの詳細を詰めていく必要がある。

また、各部局単位で、それぞれ独自の方法によって授業のピアレビューが行われ、学期ごとに FD 委員会に報告書が提出された。

(2)活動一覧

＜FD 委員会＞

日程	回	内容
4 月 16 日 （Web 会議）	第 1 回	【議題】 1. 委員構成について 【報告】 1. 2025 年度春季新任教員 FD 研修実施報告 2. 2025 年度 FD 活動の推進予算配当結果について 【その他】 1. 2025 年度 FD 委員会開催予定 2. 大学教育学会第 47 回大会について
6 月 11 日 （Web 会議）	第 2 回	【議題】 1. 2025 年度 1 学期授業評価アンケート実施について 2. 2025 年度夏季新任教員 FD 研修実施について 【報告】 1. 各 WG の活動状況について 【その他】 1. 1 学期ピアレビュー実施報告書作成について 2. 図書購入希望について
9 月 3 日 （Web 会議）	第 3 回	【議題】 1. 2025 年度「全学 FD 研修」実施について 2. 2026 年度 FD 活動の推進予算（案）について 【報告】 1. 2025 年度夏季新任教員 FD 研修実施報告について 2. 各 WG の活動状況について 【その他】 1. 図書購入希望について（再掲）
11 月 12 日 （Web 会議）	第 4 回	【議題】 1. 2025 年度 2 学期授業評価アンケート実施について 【報告】 1. 2025 年度第 1 回全学 FD 研修実施報告 2. 各 WG の活動状況について 3. 1 学期ピアレビュー報告 【その他】 1. 図書購入について

2月18日 （Web会議）	第5回	【報告】 1. 2025年度FD活動報告について 2. 2026年度FD活動計画について 3. 2025年度第2回全学FD研修実施報告 4. 「ファカルティ・ディベロッパー養成研修会」参加報告 5. 各WGの進捗について 6. 2学期ピアレビュー実施報告 7. 2026年度FDアドバイザーについて

＜研修・講演会等＞

日程	項目	講師等
4月3日	春季新任教員FD研修	上月　翔太 （FDアドバイザー）
8月25日	夏季新任教員FD研修	上月　翔太 （FDアドバイザー）
9月22日 ～10月31日	第1回全学FD研修（必修研修） 「教学IRと教育改善のためのデータ活用 ～志願動向と入学者アセスメント」	日高　京子 （基盤教育センター　教授）
10月22日	第2回全学FD研修（必修研修） 「アントレプレナーシップ教育」	濱本　伸司　氏 （一般社団法人　フミダス　代表）

(3)委員構成

2025年度のFD委員会は委員長1名、副委員長1名、委員16名、アドバイザー1名で構成される。

役　割	氏　名	所　属	職　名
委員長	後藤　宇生	経済学部経済学科	教　授
副委員長	狭間　直樹	法学部政策科学科	教　授
委　員	Rodger Williamson	外国語学部英米学科	教　授
委　員	祝　利	外国語学部中国学科	准教授
委　員	李　東俊	外国語学部国際関係学科	准教授
委　員	前田　淳	経済学部経済学科	教　授
委　員	村原　英樹	経済学部経営情報学科	准教授
委　員	門田　彩	文学部比較文化学科	准教授
委　員	濱野　健	文学部人間関係学科・社会システム研究科	教　授
委　員	齋藤　友美子	法学部法律学科	准教授
委　員	高木　超	法学部政策科学科	准教授
委　員	片岡　寛之	地域戦略研究所（地域創生学群）	教　授
委　員	礒田　隆聡	国際環境工学部生命工学科	教　授
委　員	黎　暁紅	国際環境工学部環境化学工学科	教　授
委　員	藤田　俊	基盤教育センター	准教授
委　員	井田　浩之	基盤教育センター	准教授
委　員	植田　正暢	基盤教育センター（ひびきの分室）	教　授
委　員	松田　憲	マネジメント研究科	教　授
アドバイザー	上月　翔太	FDアドバイザー	講　師

2025年度　北九州市立大学FD活動報告書
2026年3月発行

編集・発行　北九州市立大学 FD委員会
〒802-8577
福岡県北九州市小倉南区北方四丁目2番1号